

F M U NEWS Letter

JANUARY 09, 2026

Vol.43

Signature Topics

greetings of the year by the President

その先へー福島県立医科大学が描く、次なるビジョン ～ひとりひとりの発想力と独創力が、かたちにする～

2026年1月5日、仕事始めにあたり、竹之下誠一理事長兼学長より、全職員を対象に、新年の挨拶がありました。

(以下抜粋)

今年は東日本大震災から15年という区切りの年です。この15年は、福島の復興のため、そして本学をさらなる高みへと発展させるための苦難と変革の連続であったことは皆さんも認める所だと思います。

その間には多くの仲間が加わり、また、去っていきましたが、その積み重ねの上に、今の本学があります。その時その時の誰もが同じ志を抱き、一丸となって尽力してくださった結果、長い時を経てそれらの努力の成果が輪郭を現し始めました。

未来へ動き出した、確かな前進

一例として、原発事故後休止していた県立大野病院の後継医療機関を本学の附属病院として整備・開院することについて、構想段階から基本設計へと着実にフェーズが進んでいます。双葉地域の医療復興の象徴として住民が安心して生活するための中核施設となるよう、本学もしっかり準備を進めていきたいと思っています。

また、2016年6月から稼働を始めたサイクロトロンを活用し開始された、アスタチンを用いた放射線内用療法の研究も、ついに前立腺がん治療候補薬のヒトへの投与、治療が始まります。いよいよ長年にわたる研究の成果を患者さんに提供できる可能性が高まってきました。

さらに、大学院保健科学研究科博士後期課程の設置に向けた準備も本格化します。

2021年に保健科学部を、昨年(2025

年)の春には大学院保健科学研究科保健科学専攻(修士課程)を開設。今回、この課程が整備されれば、3学部全てに博士後期課程が揃うこととなります。次代を担う高度な医療人材を育成する基盤が、また一段と強固なものとなります。

成果の先にある、新たなビジョン

これまでの皆さんの尽力に心より御礼申し上げます。

しかし、私はあえて申し上げます。ゴールが近づいたのではなく、新たなスタートラインに立ったのです。むしろ、このタイミングは、私たちに新たなビジョンが求められている時だと意識してください。

ビジョンとは今はまだ存在しない未来像です。そしてミッションは、その未来像を作り上げるためになすべきことです。

今となっては知る人は少ないでしょうが、本学の復興構想は、震災直後のごく短期間に国や県に提示することが出来ました。だからこそ多くのことが他に先駆けて予算化され、いち早く取り組むことが出来たのです。

なぜ迅速に復興構想をまとめられたのか。我々には震災前から描いていた「三十年後の福島医大の在り方」というビジョンがそもそもあったからなのです。

ひとりひとりが、次世代をつくる

クリアすべき個々の課題に捉われることなく、より良い教育、より良い研究、より良い診療、より良い県民の見守り方、そしてより良い福島県のために、ひとりひとりの思いや夢を、組織として体系化する作業に今年は



取り組んでほしいと思います。

皆さんが描く独創的なビジョンこそが、次世代の福島県立医科大学を創り福島未来を照らす光となります。

変わらぬ思い、変える未来

私は皆さんに一貫したメッセージを発信してきました。

「ピンチをチャンスに」「変化を進化へ」「レジリエンスとアライアンス」です。これからもこのメッセージは変わりません。

さらなる高みへと発展していこうとする全ての教職員の皆さんの思いを新たなビジョンへと形作ることこそが、この福島県立医科大学、そして皆さん自身をも何にも、誰にも代えがたい存在にしてくれることと信じています。

皆さんの限りのない発想力と独創力に期待しています。

挨拶の全文は、HP
「学生・教職員の方へ」
に掲載しています。



2025年度看護功労者知事表彰及び優良看護(永年)職員表彰

#看護功労者知事表彰 #優良看護職員表彰 #看護の力



2025年10月25日、福島県看護協会館みらい(郡山市)において、福島県看護協会の令和7年度看護功労者表彰式が開催されました。

長年にわたる保健医療分野への貢献が認め

られ、当院の職員が表彰されました。受賞者の皆さん、おめでとうございます。今後もますますご活躍されますよう祈念しております。

「看護の日」制定35周年記念
知事・県看護協会会長連盟表彰

・会津医療センター
山田香代子 副院長 兼 看護部長

県看護協会会長表彰

・福島県立医科大学附属病院
二丹玲子 副院長 兼 看護部長

優良看護職員表彰

・福島県立医科大学附属病院
加藤園 看護師長

・会津医療センター
佐藤英子 主任看護技師



Report

尊い御志に感謝を捧げる 一第76回福島県立医科大学 解剖慰霊祭を挙行

#解剖慰霊祭 #献体への感謝 #医学教育の礎

2025年10月29日、本学講堂において「第76回 解剖慰霊祭」を挙行了しました。

式典には、御遺族ならびに来賓の皆様をはじめ、教職員、学生が参列し、医学教育・学術研究のために尊い御遺体を提供くださった故人の御霊に、深い感謝と哀悼の意を捧げました。

本年度は282柱の御霊をお慰めし、これまでに本学が慰霊してきた御霊は累計18,838柱となりました。

献体は、医学部生の系統解剖教育をはじめ、病理解剖や法医学解剖など、医療の発展と専門職育成に欠かすことのできない礎となっています。故人の崇高な御意志と、御遺族の深い御理解と御

協力に、改めて心より敬意と感謝を表しました。

竹之下誠一理事長兼学長は、「医療に携わること志す者の育成のために御遺体を供してくださる、その崇高な御心なくして、本学の医学教育は成り立たない」と述べ、献体者と御遺族への深謝の意を表しました。

学生を代表して医学部3年湯澤勇斗さんは、「御厚情に報いるため、人々の健やかな人生を支える医師となれるよう、日々研鑽を積む決意」を述べました。また、遺族代表からは、「献体者の遺志が、未来の医療を支える礎となることを願う」との言葉が寄せられました。

本学は今後も、故人の御志と御遺族の思いを



胸に、病に苦しむ人々の生命と尊厳を守る医療人の育成と、社会に貢献する医療・研究の発展に全力で取り組んでまいります。

詳細はこれから
ご覧ください。



Report

その白さは、覚悟の色 一令和7年(2025年)度福島県立医科大学 白衣式を挙行

#白衣式 #臨床実習への第一歩 #医の道を歩む

2025年10月22日、本学講堂において「白衣式」が挙行され、附属病院長より医学部4年生130名ひとりひとりへ大学の校章と氏名が刺繍された白衣が授与されました。

「白衣式」は、医師を目指す者としての心構えを新たに、自覚を持って臨床実習に臨んでもらうことを目的に行われます。

学生たちは、10月27日から、72週間にわたり本学附属病院等で実際に患者さんに接しながら医学を学ぶ臨床実習(BSL)をスタートさせました。

医学部生が診療参加型の臨床実習を行うためには、共用試験と呼ばれる全国共通の試験に合格し、「臨床実習生」として認定を受ける必要があり、その厳しい試験を突破して「白衣式」を

迎えることができます。

式典では、藤森敬也医学部長(代読永福智志医学学生部長)より「臨床実習を通じて多くのことを学び、成長し、医学の道を歩んでいけることを楽しみにしている」、続いて大平弘正附属病院長より「病院の職員と同様の仲間として歓迎するとともに、今後の成長と飛躍を願っている」と激励の言葉があり、学生たちは医師の道を歩む決意を新たにしました。

最後に、学生代表の青木伶央さんが「多くの課題に直面すると思うが、不断的な努力を惜しまない」と誓いの言葉を述べ、手にしたばかりの白衣を身に着けた学生たちは、新たな一歩を踏み出しました。

白衣に身を包み、決意を新たにした真剣な表情からは、これから始まる学びと成長への強い意志が感じられ、今後の活躍が期待されます。

詳細はこれから
ご覧ください。





高度医療・専門技術を肌で感じる2つの体験会開催

#高度医療体験会 #専門医療職体験会 #未来の医療人育成

福島県立医科大学では、次世代の医療を担う人材育成の一環として、福島県内のコース制導入校の高校生を対象とした2つの体験会を福島県教育委員会と開催いたしました。

■専門医療技術職体験会

11月8日には、福島県教育委員会との連携事業として、保健・医療コースに在籍する44名の生徒と保護者が参加しました。理学療法、作業療法、診療放射線科学、臨床検査科学の4分野に分かれ、3Dプリンターを用いた自助具製作やMRI検査のプロセス、顕微鏡による病理検査など、高度な医療機器を用いた実習が行われました。保健科学部の学生たちが、専門職としての心構えや学びの魅力を伝える貴重な交流の場となりました。

■第2回高度医療機器体験会

12月7日、将来の医師を志す高校生34名と保護者を対象に開催されました。生徒たちは、手術支援ロボット「ダヴィンチ」の操作デモンストラーションや、豚の心臓を用いた植込型補助人工心臓(VAD)の解剖学的学習などを体験しました。また、本学が取り組む放射線治療の外照射(高精度放射線治療)、内照射(放射性薬剤を用いた診断・治療)について学びました。医学部生10名もサポーターとして参加し、自身の志望動機などを通じて高校生の具体的な進路イメージ形成を支援しました。

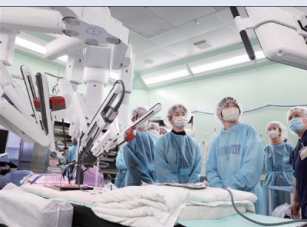
■開催意義と今後の展望

これらの事業は、本学が掲げる「地域医療の確保」と「高度医療の提供」を推進するための重

要な戦略的取組です。早期から本学の最先端の教育・研究リソースに触れることで、高校生たちが抱く医療への憧憬を確かな使命感へと変え、将来の福島を支えるリーダーを育成する基盤を築くことを目的としています。参加した高校生からは「医師を目指す実感が湧いた」「本学の高度な環境で学びたい意欲が高まった」といった力強い声が寄せられています。

2026年度も本事業は継続開催を予定しており、次年度は新たに看護学部も含めた、より包括的なプログラムとしての実施に向けて協議を進めます。

本学は今後も福島県並びに関係機関と一体となり、次世代を担う医療人の育成を全力で推進してまいります。

須賀川支援学校医大校の児童生徒
第27回全国院内学級絵画展覧会で優秀賞を受賞しました

#須賀川支援学校医大校 #全国院内学級絵画展 #学びをつなぐ

須賀川支援学校医大校の児童・生徒3名が、「第27回全国院内学級絵画展覧会」のパソコン部門において優秀賞に輝き、2025年10月18日に発表されました。

パソコン部門には、表現力豊かで創造性あふれる計25点の作品が全国から出展されまし

た。その中で同校の児童・生徒が制作した作品は、力強い色彩と見事な構図が特に目を引き、高い評価を得ての受賞となりました。

病気と向き合いながら、限られた環境の中で一筆一筆に思いを込め、自身の感性をのびのびと表現した児童・生徒の皆さんに、心からの

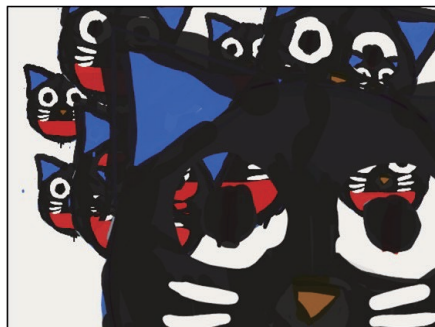
敬意を表します。

この受賞は、本人たちの大きな自信につながるとともに、周囲で見守る方々にとっても大きな希望と元気を与えるものとなりました。



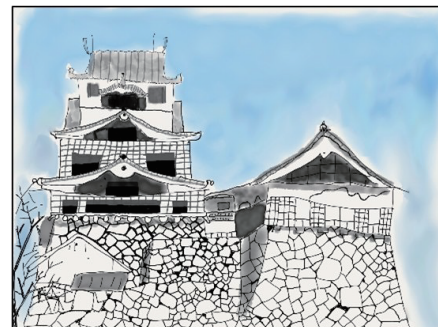
「てんとう虫」

リズムカルに配置されたてんとう虫たちが、画面に奥行きと躍動感を与えています。規則性の中に遊び心を感じさせる、モダンなデザイン性が光る一枚です。



「見たにゃ〜」

画面いっぱいになり合う黒猫たちの表情が印象的です。鮮やかな青と赤のコントラストが、デジタルならではの力強さを引き立てています。



「熊本城」

精緻な石垣の描写と、淡い空の色彩のバランスが見事です。お城の持つ重厚さと気品が丁寧な筆致によって見事に表現されています。





見えないものを、見るということ 第8回(2025年度)高校生対象 法医学・病理学セミナー開催報告

#法医学病理学セミナー #見えない医療を学ぶ #高校生医療体験

2025年12月20日、本学において「第8回(2025年度)高校生対象 法医学・病理学セミナー」を開催しました。

当日は県内外から約40名の高校生が参加し、医療の中でも普段は目に触れることの少ない法医学・病理学の世界に触れる一日となりました。

本セミナーでは、病理診断の基礎や病理医の役割についての講義に続き、実際の症例画像を用いた病理診断の疑似体験が行われました。正常な組織と病変の境界を探し、どこからが異常なのかを考える時間に、会場には自然と静けさが生まれました。見えなかったものが見えた瞬間の喜びが、新たな関心へとつながっていました。

法医学の講義では、「なぜ人は亡くなったのか」という問いが提示されました。特別な事件ではなく、日常の延長線上にある死因を丁寧に読み解くことが、次に生きる誰かを守る医療につながる話が語られました。死因究明の立場から医学と社会をつなぐ重要な医学領域であ

ることに、高校生たちは真剣な表情で耳を傾けていました。

講義では、日本全国で法医、病理医が慢性的に不足している現状についても紹介されました。

病理医は新しい治療法や疾患の理解を通じて臨床医学と基礎研究を結び付ける重要な役割を果たしています。

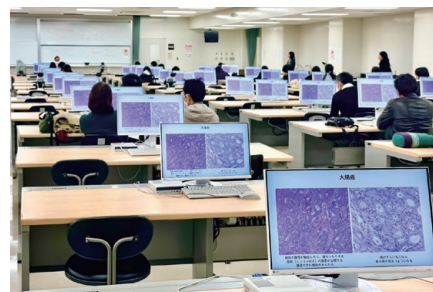
一方で、その仕事の内容や重要性は、一般には十分に知られていないのが現状です。医療現場を根底から支える専門職としての病理医の存在を知ったことは、参加した高校生にとって新たな気づきとなったようです。

参加者からは、「医師といえば患者さんの前に立つ姿を思い浮かべていましたが、見えなくて支える仕事があると知りました」「すぐに答えが出ないことを考え続ける姿勢が印象に残りました」といった感想が寄せられました。

今回のセミナーは、医師や医学を志す高校生の皆さんを主な対象として、法医学・病理学の一端に触れていただくことを目的に企画しました

が「人の命と向き合うとはどういうことか」を参加者ひとりひとりが考える機会ともなりました。

本学は、法医学・病理学の重要性を広く訴求するため、今後も本セミナーを継続してまいります。



県民の皆様の「健康長寿」を支える新たな拠点が始動 —「脳卒中・心臓病等総合支援センター」開設記念イベント開催報告

#脳卒中心臓病等総合支援センター #健康長寿を支える #地域の相談連携新拠点

福島県立医科大学附属病院は、本県における循環器病対策の要となる「脳卒中・心臓病等総合支援センター」を開設いたしました。

福島県は、脳卒中や心臓病といった循環器病の死亡率が依然として高く、これは私たちが真正面から向き合わねばならない「峻険な壁」です。この開設を記念し、2025年12月14日と21日の2週にわたり、県民の皆様と共に「心と脳の健康」を考える公開講座およびフォーラムを開催いたしました。

■地域の「相談・連携」のハブとして

本センターの役割は、急性期から仕事復帰、そして地域での豊かな生活に至るまで、患者さんとそのご家族を「孤立」させない「切れ目ないサポート」を構築することにあります。

藤井正純センター長(脳神経外科学講座主任教授)のもと、多職種が連携し、患者さんへの相談支援、地域医療機関とのネットワーク

強化、そして県民への啓発活動を三本柱として、この峻険な壁を乗り越え、県民の皆様の健康長寿を実現するための活動を推進します。

■脳卒中の「予防」と「迅速な対応」を〜

14日に開催された「第13回福島県脳卒中市民公開講座」の専門医による講演では、高血圧管理による血管保護の重要性や、発症時に迷わず救急車を呼ぶためのチェックポイントが具体的に解説され、参加者は真剣な面持ちでメモを取っていました。

■自らの健康を守る「第一歩」に

21日の「ふくしま健康ハート&ブレインフォーラム2025」では、「学んで・体験して・実践する」ことをテーマに、県民ひとりひとりが自らの健康を守るための第一歩を踏み出すきっかけづくりとして多彩なプログラムを展開しました。

講演会では、循環器内科学講座石田隆史教授らが登壇。会場では運動体験や血管年齢

チェックも行われ、日常生活で活かせる健康行動のヒントを熱心に吸収する参加者の姿が印象的でした。

■福島未来を、医療の力で守る

二つのイベントを通じて、多くの方に来場いただき改めて県民の皆様の健康に対する関心の高さが示されました。本センターは今後、県内各地域の医療・介護関係者との連携をより一層深め、本県における循環器病対策の活動を推進してまいります。



Sunrise Japan Hospital Phnom PenhとMOU(覚書)を締結



前列中央: 竹之下理事長兼学長(福島県立医科大学)、岡和田院長(Sunrise Japan Hospital Phnom Penh)

福島とカンボジア をつなぐ医療連携

福島の知をアジアへ
アジアの知を福島へ
グローバルに活躍する
医療人材を育成

#国際医療連携 #カンボジアとのMOU #グローバル人材育成

福島県立医科大学は、2025年10月27日、カンボジアのSunrise Japan Hospital Phnom Penhと、学术交流に関する覚書(MOU)を締結しました。

Sunrise Japan Hospital Phnom Penhは、「日本の医療をまるごと輸出する」という理念のもと、2016年に開院した、日本の民間会社 Sunrise Healthcare Service Co., Ltd.が運営する日本式の総合病院です。

質の高い医療の提供と現地医療人材の育成に取り組んでおり、本学とは、小橋友理江講師ら

医療者の派遣や共同研究等を通じた交流を重ね、今回の覚書締結に至りました。

岡和田学病院長は、地元・福島への思いを語るとともに、「福島県立医科大学との交流を通じ、将来的にアカデミックな分野での大きなプロジェクトが実現することを期待している」と、今後の交流への意欲を示しました。

竹之下誠一理事長兼学長は、「Sunrise Japan Hospitalの取り組みは、カンボジアの医療水準向上に貢献する国際医療連携の模範であり、当大学にとっても大きな学びである」と述

べ、「本協定を新たな出発点として、協力関係をさらに発展することを願っている」と語りました。

今回の協定締結により、本学は「地域に根ざし、世界とともに歩む」という理念のもと、国際性を備えた医療人材の育成を推進するとともに、カンボジアにおける医療水準の向上に貢献してまいります。

詳細は、
こちらをご覧ください。



Report

核医学と緊急被ばく医療の実務連携を前進

—韓国原子力医学院(KIRAMS)との第2回国際シンポジウムを開催

#国際シンポジウム #核医学と緊急被ばく医療 #日韓医療連携

2025年12月12日、福島県立医科大学(FMU)と韓国原子力医学院(KIRAMS)は、2025年2月に締結したMOUに基づき、韓国ソウル市のKIRAMSにおいて、本年2回目となる合同国際シンポジウムを開催しました。

本シンポジウムでは、放射性同位体の製造、標的アルファ線治療、ラジオセラノスティクスの臨床応用、規制対応、緊急被ばく・原子力災害医療対策、医療従事者の教育・訓練、リスクコミュニケーション、国際協力を主要テーマとして、活発な議論が行われました。

開催にあたり、KIRAMSのJin Kyung Lee理事長は、「本日の会議は具体的な交流のスタートで、私たちが達成したいことについて、率直かつ誠実に話し合う機会だ」と述べました。

竹之下誠一理事長兼学長は、「研究の加速や専門知識の共有を通じ、両国の患者と地域社会

により良い成果をもたらす重要な連携である」と述べました。

核医学分野では、KIRAMSのKyo Chul Lee博士が、3基のサイクロトロンを活用した医療用ラジオアイソトープの製造と臨床試験計画を紹介しました。

本学からは、織内昇特任教授がAt-211を用いた標的アルファ線治療研究の進展を報告しました。

緊急被ばく医療分野では、KIRAMS緊急被ばく医療センター(NREMC)長のMinsu Cho博士がセンターのミッションを紹介した後、長谷川有史教授が、福島第一原子力発電所事故から得られた教訓を基にした原子力災害医療の教育・研修訓練の実践を紹介しました。

特別講演では、山下俊一副学長が「福島原発事故後の健康危機管理」と題して講演し、県民健康調査事業を通じた放射線リスク理解と公衆

衛生対応の重要性を紹介しました。

翌13日には、KIRAMS-NREMCにおいて、WHO-REMPAN地域セッションが開催されました。福島医大の菅谷一樹助教による報告の後、将来世代の育成と確保について活発な意見交換が行われ、両機関は今後も緊密に協力していくことで合意しました。

詳細は、
こちらをご覧ください。



次期理事長予定者に、鈴木弘行主任教授を選出

本学は2025年12月4日に理事長選考会議を開き、鈴木弘行主任教授を次期理事長予定者に選出しました。

鈴木教授は同日夕刻の共同記者会見で、次期理事長としての抱負を述べました。

「このたび、次期理事長予定者として選任いただきました。紙面をお借りし、日頃より本学を支えてくださっている教職員の皆様に、心より御礼申し上げます。

私は1990年に本学を卒業し、部活動や先輩、仲間、そして多くの患者さんとの出会いに育まれながら、外科医として福島で歩んでまいりました。

2016年に呼吸器外科教授に着任し、2019年からは附属病院院長、続いて教育・研究担当理事としての役割を担う中で、現理事長のもとで日々学ばせていただいた多くの示唆と、手厚いご指導の積み重ねによるものと、深く感謝しております。

加えて、こうした歩みは、歴代理事長をはじめとする諸先輩方が長年にわたり築き上げてこられた確かな基盤の上に成り立つものです。

医師として福島で歩み続ける中で、米国ピッツバーグ大学での研究経験を通じて、がん

免疫を学びました。

帰国後は、肺がんに対する低侵襲手術や免疫療法の推進、若手医師の育成、全国トップ級のロボット外科術者の育成、当該領域における臨床試験数でも国内上位の実績の積み重ね、県内医療の均てん化推進に関わる機会を得ることができました。これは私一人の力ではなく、現場で汗を流す皆さんの情熱があったからこそ実現した「私たちの誇り」です。

こうした経験を通じて培ってきた学びを胸に、現体制を支え、着任の日を見据えるにあたり、私は三つの視点を大切にしていきたいと考えております。

第一に、人間性と高度専門性を備えた医療者の養成。「心・知・技・地域」という本学の原点を再確認し、「人の痛みに向き合い知性を育む教育体制」について考えを深めていきます。

第二に、国際的研究体制の強化。空間的プロテオミクスやAI基盤など研究環境の充実を図りつつ、三学部それぞれの有機的な連携を通じて、垣根なき「知の循環」を目指します。

第三に、2050年を見据えた医療体制の構築。DXによる効率化を進め、教職員の皆様が本来の使命に集中し、自己研鑽を積める持続



可能な環境づくりに努めます。その成果を教育・研究・地域医療へと還元することで、県全体の医療力の底上げに貢献したいと考えます。

現在、本学は医療を取り巻く環境の大きな変化のただ中にあります。こうした時代にあっても、人を育て、知を循環させ、地域とともに歩む——その基本を見失うことなく、一步一步前進することが何より大切だと考えています。

野口英世の言葉に「忍耐は苦い、しかしその実は甘い」という一節があります。多くの先達が積み重ねてこられた努力の「実」を皆で分かち合いながら、未来へと確かにつないでいけるよう、学び続けてまいります。今後とも、皆様のご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。



Report

【学生表彰】学びを確かな行動力へ。緊迫の現場で命を救った医学部生たち

#医大生が人命救助 #学びを確かな行動力へ #大学として大きな誇り

本学では2025年12月、学外において人命救助に尽力した学生の模範的な行動を称え、2件の学生表彰を行いました。いずれも、日々の学修で培われた知識・技術・倫理観が、突発的な緊急事態において確かな行動力として発揮された事例であり、本学の教育理念を体現するものです。

1件目は、医学部4年の高橋知己さん。7月、磐梯山を下山中に転倒し負傷した登山者を発見し、声かけを行いながら症状を丁寧に聞き取り、携行していた応急処置セットを用いて足部を固定。歩行が可能であることを確認したうえで、安全な下山につなげました。

負傷者はその後、医療機関を受診し回復しており、後日ご家族が来学し感謝の言葉を述べられるなど、その冷静で確かな対応は大きな安心をもたらしました。

高橋さんは、「本学で学んだ救急対応の知識

が実際の現場で生かされたことを実感した経験であり、今後も研鑽を重ね、困っている方に寄り添える医師を目指す決意を新たにしたい」と語っています。

2件目は、医学部5年の伊藤英聖さん、横田百奈さん。9月、ゴルフ場で心肺停止となった方に対し、先輩医師の指導のもと、脈拍確認や胸骨圧迫などの救命処置を迅速かつ的確に実施し、尊い命を救いました。伊藤さんは、「大学での学びと日頃の訓練が、緊迫した状況下でも落ち着いて行動する支えとなった経験である」、横田さんは、「チームで連携しながら行動できたことが救命につながった実感であった」と振り返っています。

表彰にあたり、竹之下誠一理事長兼学長は、「突発的な緊急事態において学びを生かし、冷静かつ的確に行動した学生たちの姿は、本学の教育理念を体現するものであり、大学として



大きな誇りである」と述べました。

今回の表彰は、受賞した学生のみならず、すべての学生・教職員にとっても大きな励みとなるものであり、「人のいのちを守る大学」としての本学の姿を改めて示しています。